

岡本太郎の多面的活動に関する一考察

—— 雑誌・新聞・テレビとの関わりをめぐって ——

春原史寛
群馬大学教育学部美術教育講座
(2014年9月17日受理)

A Study on Multifaceted Activities by Taro Okamoto

—— Focusing on Relations with Magazines, Newspapers and Television ——

Fumihito SUNOHARA
Department of Art, Faculty of Education, Gunma University
(Accepted on September 17th, 2014)

1. はじめに

岡本太郎(1911~1996)は、1999年の川崎市岡本太郎美術館の開館記念展が「多面体・岡本太郎一哄笑するダイナミズム」であったことが象徴するように、美術の枠には収まらない多面的な活動を繰り広げた芸術家である。その活動は常に社会と美術を結びつけることを目指しており、だからこそ、美術と社会の接点を多数保持するために、多面性が必要だったのではないだろうか。美術の社会化を求めるその姿勢は、例えば、壁画やモニュメントなどのパブリック・アートの積極的な制作や、日本万国博覧会のテーマ展示プロデューサーとなって《太陽の塔》(1970年)を実現したことに現れている。あるいは、ラジオやテレビなどのメディアへの積極的な露出を挙げることもできるだろう。

稿者はこれまで著者としての岡本に着目して研究を進めてきた¹⁾。1954年のベストセラー『今日の芸術』をはじめ、美術の愛好者ではない一般の人々に美術について十分に伝えるために、自らの手段として、作品の発表同様に出版を重要視しているのである。その傾向は、単行書以上に、新聞や雑誌への寄稿においてより顕著となる。その媒体は、中央紙、

地方紙、業界紙、総合雑誌、文芸雑誌、美術雑誌、ファッション、スポーツ、食、企業の広報誌など多岐にわたる。

例えば、仲野泰生は「美術教育の育成しようとしている「個」にとって、岡本太郎の「多面的な個」の実験的な生きかたこそ、参照すべき手本なのかもしれない」と指摘しているが²⁾、岡本がどのような新聞や雑誌に文章を書いているかを探ることで、その人間本来の多面性を考察することができそうなのである。出版メディア、特に単行書以上にジャンルが広く、専門家ではない一般の読者に身近な新聞や雑誌こそが、岡本の「多面的な個」の実験の場となっていたのではないか。

そこで本稿では、岡本の雑誌・新聞への寄稿の傾向を検討することで、著者としての岡本の多面性を考察したいのである。そのために、「青山時代の岡本太郎 1954-1970」展図録(川崎市岡本太郎美術館、2007年)に掲載の「岡本太郎主要文献目録」を資料として(A5判2段組32ページにわたる膨大な目録である)、本目録の「逐次刊行物等」に掲載の著作の掲載新聞名・掲載雑誌名を調査する。その結果を表1としてまとめた。なお、時期は戦後に限定し、単行書(自著・寄稿)や対談等は除外した。これに

より、著作者としての岡本が活躍の場とした舞台の傾向が見えてくるはずである。文章の内容ではなく、その発表の場と、読者がどのような環境において岡本のメッセージを受容したのかを考察する試みである。

また、岡本太郎とメディアの関係について、近年では例えば、川崎市岡本太郎美術館「生誕100年 人間・岡本太郎」展図録（2011年）で論じられていて参考となる（特に、吉田成志の論考「岡本太郎の映画批評」および「万博と大衆」）。ここではテレビとの関係が言及されており、本稿では、稿者が入手した3冊の岡本が出演したテレビ番組台本を紹介し、岡本とテレビの関係についても言及したい³。

以上の考察を通して、今後の岡本太郎研究のためのひとつの資料としたいと考える。

2. 岡本太郎と雑誌・新聞メディアとの関わり

戦後の動向の概観

1946年、35歳の岡本は、終戦後に捕虜生活を行っていた中国から復員し、この年の6月に東京に戻ったばかりであった。この年から、戦後の岡本の雑誌への執筆が始まった。1940年代後半、ごく少数から開始された新聞・雑誌への掲載件数は、1950年に一挙に50件に増え、1950年代前半は再び落ち着くものの、1955年に80件、1956年に92件とさらに増える。いかに岡本が雑誌や新聞というメディアを重視していたか、またその親和性がうかがえる。1950年代後半は50件前後の年が続き、1960年には81件、1960年代前半も、毎年30から60件前後のコンスタントな雑誌への寄稿が行われ、1965年には『週刊朝日』への連載があったこともあって92件を記録した。

1950年の増加については、秘書である岡本敏子（後に養女となる）が岡本太郎の活動に加わり、口述という形式によってより早く原稿が作られるようになったことも指摘出来るだろう。岡本敏子は「そのうちに彼は字を書くことから解放されて、それがすっかり気に入ってしまったらしく、全然書かなく

なった。走り書きのメモだけしておいて、私が来るのを待っている。口述して、それを原稿用紙に書かせ、手を入れてまた清書する。何度も何度も繰り返すこともあった」と述懐している⁴。

しかし、1966年は5件と一気に1桁に落ちて、1950年代に見られたような勢いは今後現れなくなる。一時期、1979年から1981年まで『Weekly プレイボーイ』（集英社）で人生相談を担当したことから、この3年間は寄稿が増えるが、1桁台の雑誌寄稿は1996年の没年まで続く傾向となった。

この掲載件数減少のきっかけのひとつは、1967年7月に、日本万国博覧会テーマ展示プロデューサーを委嘱され、それ以降、万国博終了までの多忙にあるのではないだろうか。

さらには、岡本とテレビとの関わりが関係しているだろう。1981年に岡本は「日立マクセルビデオカセット」のCMに出演しており、そこで叫んだ言葉「芸術は爆発だ」が大変な流行となった。さらに、1986年4月から、日本テレビ「鶴太郎のテレもんじゃ」にレギュラー出演しており、「バクハツだ!」「なんだかわからない」が流行語大賞語録賞を受賞している⁵。また、フジテレビの「笑っていいとも!」や日本テレビの「今夜は最高」などバラエティ番組への出演も特筆される。このように岡本がテレビというメディアに積極的に関わるようになるのが1980年代であり⁶、自身の発信を行う場の中心が、雑誌・新聞だけではなくなくなったことを示しているといえるだろう。吉田成志が「80年代、バラエティ番組などに頻繁に露出したことによって、日本の大衆に「岡本太郎」=「芸術は爆発だ!」=「ゲイジツ」という印象を付け、それはまとめて「美術／芸術」という分野全体のアイコンとして認知されていったことは過言ではないように思う」と述べている通り⁷、日本における芸術イメージのアイコンとなっていくのである。

女性向け雑誌への関わり

ところで、戦後の岡本の雑誌メディアとの関わりは、1946年12月の、若い世代の女性を対象とした『新女苑』（実業之日本社）への「フランスのクリス

マス」(絵と文)の寄稿から始まっている。

以下、岡本の著作目録に初めて登場する年とともに記すと、1947年の『女性線』(女性線社)、『婦人文庫』(鎌倉文庫)、1948年の『婦人朝日』(朝日新聞社)、1949年の『婦人』(世界評論社)、1950年の『婦人民主新聞』(婦人民主クラブ)、『女性改造』(改造社)、1953年の『婦人公論』(中央公論新社)、1954年の『婦人画報』(婦人画報社)などはすべて女性雑誌であり、1955年の『装苑』(文化出版局)や1950年の『ドレスメーカー』(鎌倉書房)、『ファッション・ニューズ』(日興社)は洋裁の専門誌、ファッション誌である。岡本の雑誌メディアとの関係が、女性向けの雑誌に力点が置かれてはじめられていることは興味深い。

ここで、戦前から刊行されていた『婦人画報』(1905年創刊)、『婦人公論』(1916年創刊)、『新女苑』(1937年創刊)についていえば、かつて、岡本太郎の母である小説家・歌人の岡本かの子の作品を掲載していた雑誌でもあることを想起すべきであろう。戦前の1941年に刊行された、岡本太郎『母の手紙』(婦女界社)は、戦後、早くも1950年に改訂版として月曜書房から刊行されている。岡本太郎と母かの子との結びつきのイメージは、戦後の著者としての岡本の需要や受容に大きく関わっていると思われる。

一方、戦後に創刊された『女性線』(1946年創刊)、『女性文庫』(1946年創刊)、『婦人朝日』(1946年創刊)、『婦人』(1947年創刊)や、『ファッション・ニューズ』(1950年創刊)、『ドレスメーカー』(1949年創刊)については、戦前から継続する『婦人公論』などとは趣を異にするもので、子どもや青年同様、戦後の新しい読者層として登場してきた女性に向けられた雑誌に、その創刊直後の重要な時期から関わっていることになる。これも、美術と社会との接点を生み出す戦略だったのではないだろうか。

多分野の専門誌との関わり

岡本の活動の中心であった美術に関しては、例えば1949年は『美術手帖』の件数が非常に多いが、その後もコンスタントに掲載が続くのは『藝術新潮』である。『藝術新潮』については、岡本の記事の掲載

件数全体が減る1960年代後半以降も晩年まで掲載が続いている。岡本がどの美術雑誌をなぜ選んで活動の場としたのかも、今後検討すべき事項であろう。

次に、映画雑誌として、1948年の『スクリーン』、1949年の『キネマ旬報』、1951年の『映画評論』、1955年の『映画芸術』などが挙げられ、戦後すぐに岡本が関わった分野であることがわかる。

また、時期的には少し遅れて、カメラ雑誌として、1950年の『カメラ』、1954年の『アサヒカメラ』、『ニッコール』、1955年の『フォトアート』、『カメラハンドブック』などが、いけばなの雑誌として、1954年の『草月』、1955年の『いけばな草月』、『小原流插花』、1959年の『現代插花』などが挙げられる。さらに遅れて、1956年の『建築文化』、『新建築』、『リビングデザイン』、『日刊建設通信』、1958年の『建築雑誌』など、建築雑誌との関わりが入ってくる。これらの動向には、岡本が各種・各地の日本の伝統の取材に用いた写真や、1954年に設立した「現代芸術研究所」における多分野の専門家たちとの協働、あるいは1956年に手がけた東京都庁舎陶板壁画のような建築と結び付いたパブリック・アートの制作のような活発な活動が反映されている。

以上見てきたように、岡本の自筆記事の掲載状況からも、その多面的活動の状況をうかがうことが出来るのである。

3. 岡本太郎のテレビ出演— 3冊の台本から

本稿の最後に、稿者が所有する、岡本が出演したテレビ番組の台本3冊を紹介して、岡本が雑誌などの活字メディアから力点を移していったテレビについて、岡本はどう関わり、どのように評価されたかを考えてみたい。

1958年のトークショー

図1は、関西テレビ「おはこうら表」(第79夜)の台本であり、副題として「日本のよいところフランスのよいところ」とある。内容から判断すると毎回異なったゲストを招く15分間のトーク・音楽番組のよ

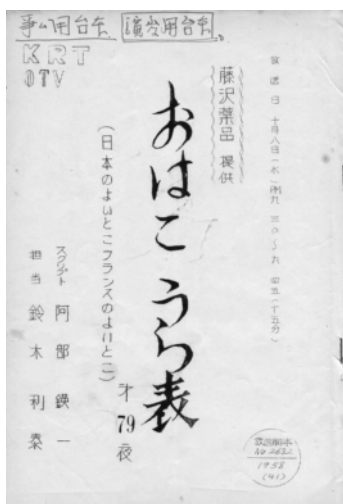


図1

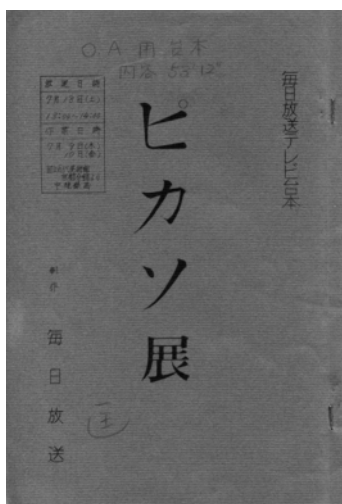


図2

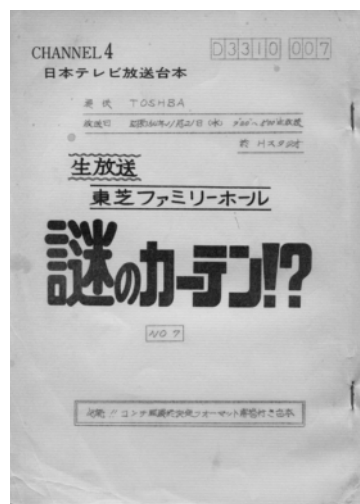


図3

うである。司会は女優で宝塚歌劇団出身の葦原邦子で、1958年の10月8日（水）21：30～21：45に放送の回の出演者が岡本であった。

台本によれば、セットはスタンドバーのイメージで、岡本の絵画が2点展示されたという。冒頭で葦原が「二科会の岡本太郎画伯にゲストになって頂きました」と岡本を紹介する。台本には葦原「ところでこんな（ママ）申し上げては、本当に失礼なんですけど岡本さんの画かれる絵は美しいとは思うんですけど何を現らわしているか、ちょっと判断に迷う事があるんですけど…」とあり、その応対として岡本「そうですね、そんなことをおっしゃる方が多いんですが、たとえば、ここにある絵ですがね」と続く。岡本が2点の作品の説明を行い、葦原「こういう風に説明して頂くと良く判りますね。今までアブストラクトの絵は判らないものと決めていましたけど、仲々味のある面白いものですね」とあり、岡本「一度理解して頂くと大ていの方が、このアブストラクトに興味をお持ちになりますよ」と応じる。抽象的要素を含む「判らない」絵の象徴としての岡本太郎の作品、そのような作品を追求する画家・岡本太郎という評価がこの台本の前提にあることがわかる。すでに1958年の時点で、このような岡本の位置づけが、一般の人々に親しいテレビというメディアにおいてなされていたことは興味深い。

さて、話題は刊行されたばかりの岡本の著作『日本再発見—芸術風土記』（新潮社、1958年）に移り、岡本が地方文化の話をする。次に話題はパリでの生活に移る。岡本「そのころは良い所とおもっていましたが、今の日本はもっと住みよしい、楽しいし、それに戦時中とちがいなんでも思い切り仕事が出来ることが、あのころのパリよりずっと（ママ）良いと私は思っています」。そして、番組の最後に、バンドの演奏によって岡本がシャンソンを披露する。

このようにこの番組の中だけでも、画家、パリでの生活の体験者、日本文化に関する本の筆者、シャンソンの歌い手といった多面的な岡本が紹介されているのである。それは岡本の演出であると同時に番組制作側の要求でもあっただろう。しかし、この段階では、岡本はまだ画家として紹介されているのである。

1964年の「ピカソ展」紹介番組

図2は、国立近代美術館京都分館で1964年7月10日から8月2日まで開催された「ピカソ展 その芸術の70年」の毎日放送による紹介番組台本である。7月18日（土）13：00～14：00に放送された。この番組では出品作品の紹介の後、当時、京都市立美術大学助教授であった木村重信と、国立近代美術館京都分館長の今泉篤男、そして岡本の3名による

座談会が行われている。

収録は7月9日、10日に京都で行われたが、ちょうど岡本は丹下健三から依頼されて、この7月に代々木総合体育館ロビー（この年の東京オリンピックの会場）に設置するための陶板レリーフの制作を行っており、さらには、オリンピック参加記念メダルのデザインを田中一光とともに手がけており、非常に多忙な時期であっただろうが、ピカソを体験的に語る芸術家として出演を果たしている、あるいは出演を求められているのである。

1979年のクイズ番組

図3は、日本テレビ「謎のカーテン」(No.7)の台本である。これはクイズ番組で、1979年10月から1980年10月まで放送された。レギュラー解答者は女優の寺島純子、スキーヤーの三浦雄一郎、そして岡本であった。1979年11月21日(水)19:30~20:00に生放送された回である。この回には、ゲスト回答者として俳優の佐藤英夫が登場している。岡本は司会者から「そして回答者は来週はヨーロッパ旅行のタメお休み、今週こそ全問正解と張り切る、岡本太郎さん」と紹介されている。

ここでは、かつてのテレビ番組で岡本が求められた多面的な活動を展開する芸術家の存在自体というよりも、そこから派生するイメージとしての芸術家・岡本太郎が求められており、クイズへの対応の面白さがより要求されているのではないだろうか。

4. おわりに

特に1950年代はじめから1960年代後半まで、岡本の文章が、非常に幅広いジャンルの雑誌・新聞のメディアにおいて、多くの人々の目に触れていたであろうことが確認できた。その状況は、1970年の日本万国博覧会における《太陽の塔》と、それをきっかけとした、以降のテレビへの頻繁な登場により、文字から映像へと展開していったのであろう。このようなプロセスが、岡本による「芸術家」イメージの生成過程に存在したのである。

〈注〉

- 1 拙稿「岡本太郎『今日の芸術』（1954年）とその読者—美術書出版による専門家からの美術の解放」『藝叢』29号、2014年3月、19-28頁。拙稿「ベストセラー『今日の芸術』と啓蒙者・岡本太郎の誕生」『美術運動史研究会ニュース』115号、2010年10月、8-12頁。
- 2 仲野泰生「岡本太郎に学ぶ、未知の現実への処方箋」『美育文化』48巻11号、1998年11月、35頁。
- 3 なお、岡本太郎のテレビ出演履歴については、大杉浩司編「岡本太郎テレビ年譜 1953-1992年」『岡本太郎爆発大全』河出書房新社、2011年、頁付なし、に詳細にまとめられている。
- 4 岡本敏子『岡本太郎が、いる』新潮社、1999年、39頁。
- 5 「略年譜」『「生誕100年 人間・岡本太郎」展図録』川崎市岡本太郎美術館、2011年、307頁。
- 6 岡本のテレビ出演については、「テレビ発掘 まる裸の太郎展」『川崎市岡本太郎美術館年報 平成16年度』川崎市岡本太郎美術館、2005年、16-23頁、も参照した。
- 7 吉田成志「万博と大衆」『「生誕100年 人間・岡本太郎」展図録』、川崎市岡本太郎美術館、2011年、222頁。

表1 岡本太郎の自筆文献を掲載する逐次刊行物（1946年～1995年）

※（ ）内の数字は掲載件数。（ ）がない場合は1件であることを示す。件数の多い順に50音順で並べた。

※「青山時代の岡本太郎 1954-1970」展図録（川崎市岡本太郎美術館、2007年）に掲載の「岡本太郎主要文献目録」をもとに春原が作成した。

■ 1946年：1件

新女苑

■ 1947年：21件

(5) 文化新聞
(2) 人民新聞
朝
岐阜タイムス
国際タイムス
サンニュース
ダンス
東京新聞
美貌
婦人文庫
文明
女性線
民衆の友
読売ウィークリー
読売新聞
労働評論

■ 1948年：17件

アトリエ
映画世界
鏡
芸苑
時事新報
新大阪
新生
スクリーン
世界日報
世界評論
想苑
総合文化
大学
東京大学新聞
読書
婦人朝日
報知新聞

■ 1949年：31件

(11) 美術手帖
(3) アトリエ
(3) 報知新聞
大阪新聞
改造
キネマ旬報
サロン
思索
自由国民
新東京
スポーツ毎日
生活文化
第一新聞
人間
婦人
明治大学新聞
優駿

■ 1950年：50件

(4) 藝術新潮
(4) 中央公論
(4) 美術手帖
(4) 毎日新聞
(3) アトリエ
(3) 三彩
(3) 読売新聞
(2) アサヒ芸能新聞
朝日新聞
映画新報
大阪毎日新聞
カメラ
教育復興
キング
女性改造
小説公園
女性線
新大阪
新夕刊
電信電話

東京タイムズ
東京日日新聞
図書新聞
ドレスメーカー
日本経済新聞
ファッション・ニューズ
婦人民主新聞
法政大学新聞
みづゑ
明治大学新聞
BBBB

■ 1951年：15件

(2) アトリエ
(2) 藝術新潮
(2) 美術手帖
(2) みづゑ
映画評論
改造
現代詩新講
女性改造
スクリーン
美術運動
文藝

■ 1952年：12件

(3) 美術手帖
(2) 藝術新潮
朝日新聞
アトリエ
改造
随筆
美術批評
みづゑ
歴史

■ 1953年：21件

(5) 藝術新潮
(3) みづゑ
朝日新聞

神戸新聞
産業経済新聞
淡交
東京新聞
時事新報
美術手帖
美術批評
婦人公論
文藝春秋
文藝新潮
文芸広場
毎日新聞

■ 1954年：24件

(2) 藝術新潮
(2) 読書タイムス
(2) 毎日新聞
アサヒカメラ
朝日新聞
京都新聞
神戸新聞
新潮
産経新聞
信濃毎日新聞
シンフォニー
スクリーン
草月
図書新聞
ニッコール
能楽タイムス
美育文化
美術手帖
婦人画報
婦人公論
みづゑ

■ 1955年：80件

(6) 藝術新潮
(5) いけばな草月
(5) 知性
(5) 美術手帖
(5) 読売新聞
(3) 文藝
(2) 朝日新聞
(2) 新聞の新聞
(2) 婦人画報

(2) 毎日新聞
アート
アカハタ
アトリエ
編物の友
映画芸術
面白倶楽部
小原流插花
カメラハンドブック
教育美術
群像
現代芸術の会ニュース
高校時代
神戸新聞
産業経済新聞
思想の科学
信濃毎日新聞
新女苑
装苑
草月
淡交
大法輪
中央公論
中部日本新聞
東京案内
東京玩具商報
東京新聞
図書新聞
栃木新聞
ドレスメーカー
なよたけ(文学座パンフレット)
新潟日報
西日本新聞
フォトアート
美術批評
福井新聞
婦人生活
文化月報
北海道新聞
毎日マンスリー
みづゑ
リビングデザイン
わだつみの声
ALD

■ 1956年：92件

(29) 週刊読売
(5) 藝術新潮
(5) 読売新聞
(2) 現代芸術
(2) 産経時事
(2) 装苑
(2) 知性
(2) 東京中日
(2) 二科会報
(2) 日本読書新聞
(2) ひなぎく(伊藤萬 PR 誌)
いけばな草月
オール小説
オール生活
小原流插花
教育美術
京都新聞
熊本日日新聞
現代芸術ニュース
現代芸術の会ニュース
建築文化
高校コース
娯楽よみうり
サトウ画廊月報三彩
週刊朝日
主婦の友
職場美術
新建築
草月
東京新聞
東京タイムズ
東京服飾新聞
南信日日新聞
西日本新聞
日刊建設通信
日本経済新聞
日本と中国
発展
美術手帖
美術批評
婦人公論
文庫
北海道新聞
山形新聞
洋酒天国

リビングデザイン
朗(日本電建)
Shinkentiku

■ 1957年：69件

(11) 北海道新聞
(10) 藝術新潮
(7) 美術手帖
(6) 読売新聞
(3) 信濃毎日新聞
(3) 西日本新聞
(2) 朝日新聞
(2) 知性
(2) 富山新聞
(2) 日本経済新聞
(2) みづゑ
アートクラブ機関紙
明日への手
音楽之友
キング
建築文化
高校時代
高知新聞
サンデー毎日
山陽新聞
テアトル東京
徳島新聞
読書新聞
ニッケモード
美術運動
百日草
百万人による
婦人公論
舞踊評論
文藝春秋
法政
毎日新聞

■ 1958年：48件

(5) 毎日新聞
(3) 藝術新潮
(3) 週刊読書人
(3) 美術手帖
(2) 信濃毎日新聞
(2) 読売新聞
アカハタ

朝日新聞
愛媛新聞
音楽之友
建築雑誌
建築文化
広告美術
高校コース
今日のディスプレイ
週刊女性自身
新建築
太陽
中央公論
中部日本新聞
東京タイムズ
内外タイムス
新潟日報
日刊自動車新聞
日本経済新聞
ネコスニュース
婦人公論
服装
文藝春秋
放送文化
北国新聞
毎日グラフ
みづゑ
郵政
Shinkenchiku
Today's Japan

■ 1959年：44件

(6) 毎日新聞
(3) 朝日新聞
(3) 藝術新潮
(3) 週刊明星
(2) 沖縄タイムス
(2) 産経新聞
(2) 読売新聞
近代映画
現代插花
中央公論
電報電話新聞
東京タイムズ
東京西ロータリークラブ
ニッポンショッピングニュース
西日本新聞

日本経済新聞
ネコスニュース
母の友
パンニュース
美術手帖
日立
婦人画報
仏教タイムス
文学
北海道新聞
みづゑ
読売新聞
OTV アルバム(大阪テレビ)
Plastic Art Education Center News

■ 1960年：81件

(22) 産経新聞
(9) 毎日新聞
(7) 中央公論
(5) 読売新聞
(3) 朝日新聞
(3) 東海新聞
(3) 読書人
(2) 朝日ジャーナル
(2) 藝術新潮
(2) 日刊スポーツ
(2) 美術手帖
(2) 北海道新聞
(2) 東京新聞
(2) The Mainichi
いけばな草月
沖縄タイムス
カメラ芸術
京都新聞
芸能
現代の眼
三彩
信濃毎日新聞
東京タイムズ
図書新聞
日本読書新聞
美術グラフ
婦人文芸
福井新聞
北海道新聞

■ 1961年：45件

(4) 産経新聞
 (4) 東京新聞
 (4) 北海道新聞
 (3) 朝日新聞
 (3) 読売新聞
 (2) 週刊朝日
 (2) 婦人公論
 (2) 毎日新聞
 いけばな草月
 倉敷レイヨン時報
 草津
 サンデー毎日
 四国新聞
 室内
 主婦の友
 醸造
 女性教養
 週刊現代
 ゼット
 第二の所得
 中央公論
 美術ジャーナル
 美術手帖
 文藝春秋
 放送文化
 マドモアゼル
 みづゑ
 Blue Memo(帝人PR誌)
 TBS 調査情報

■ 1962年：34件

(4) 読売新聞
 (3) 藝術新潮
 (2) 朝日新聞
 (2) 中央公論
 (2) 毎日新聞
 朝日ジャーナル
 新しい日本
 神奈川新聞
 カメラ芸術
 週刊サンケイ
 週刊女性自身
 週刊読書人
 新週刊
 数学セミナー

世界
 淡交
 ていーぼっと(日東紅茶広報誌)
 デコラ
 デザイン
 図書新聞
 富山新聞
 新潟日報
 美術ジャーナル
 美術手帖
 文藝春秋
 民芸の仲間

■ 1963年：38件

(8) 読売新聞
 (6) 朝日新聞
 (3) 毎日新聞
 (2) 中央公論
 (2) リーダーシップ
 (産業教育センター)
 芸術生活
 嗜好
 週刊読書人
 週刊明星
 週刊読売
 商店建築
 女性自身
 世界画報
 太陽
 淡交
 デザイン
 とうきょう広報

図書

時

日本経済新聞
 文藝春秋
 北陸中日新聞

■ 1964年：59件

(6) 週刊読売
 (5) 婦人公論
 (4) 朝日新聞
 (4) 毎日新聞
 (4) 読売新聞
 (2) 朝日ジャーナル
 (2) 藝術新潮

(2) 報知新聞
 岩手日報
 潮
 かつば
 神奈川新聞
 京都新聞
 月刊教育ジャーナル
 現代の眼
 高二時代
 神戸新聞
 産経新聞
 週刊朝日
 週刊平凡
 信濃毎日新聞
 ジャパン・インテリア
 人物群像
 太陽
 淡交
 中央公論
 中部経済新聞
 中部日本新聞
 東京新聞
 西日本新聞
 日本経済新聞
 日本読書新聞
 婦人の友
 フロンティア
 文藝春秋
 ベターライフ
 みづゑ
 TOP

■ 1965年：92件

(53) 週刊朝日
 (4) 朝日新聞
 (4) 山形新聞
 (3) 美術手帖
 (3) 仏教タイムス
 (2) サンデー毎日
 (2) 日本読書新聞
 愛媛新聞
 京都新聞
 グラフ黒四
 月報美
 サンデー毎日
 彩華ジャーナル

三彩
産経新聞
週刊女性自身
週刊読書人
草月
時

日本と中国
日本金融通信
文藝
寶石
報知新聞
北国新聞
読売新聞
琉球新報
Nikon

■ 1966年：5件
朝日新聞
藝術新潮
草月
文藝春秋
FRANCE-ASIEI/ASIA

■ 1967年：7件
季刊ステレオサウンド
証券のある生活（山一証券PR誌）
新婦人
北陸中日新聞
文藝
三田文学
SD

■ 1968年：1件
藝術新潮

■ 1969年：28件
(26) 読売新聞
藝術新潮
室内

■ 1970年：16件
(12) 藝術新潮
潮
近代建築
図書
流動

■ 1971年：5件
朝日新聞
季刊人類学
藝術新潮
佼成
東商

■ 1972年：6件
(2) 藝術新潮
朝日ジャーナル
藝術新潮
新潮
みづゑ

■ 1973年：2件
藝術新潮
中央公論

■ 1974年：3件
現代思想
文藝
無限

■ 1975年：1件
藝術新潮

■ 1976年：4件
(2) 藝術新潮
版画芸術
読売新聞

■ 1978年：5件
(4) 藝術新潮
新日本文学

■ 1979年：55件
(51) Weekly プレイボーイ
海
藝術新潮
現代の眼
草月

■ 1980年：58件
(50) Weekly プレイボーイ
(2) 藝術新潮
現代の眼

国立博物館ニュース
週刊ポスト
タイヤニュース
貿易之日本
流行通信

■ 1981年：22件
(17) Weekly プレイボーイ
(2) 毎日新聞
河北新報
西日本新聞
週刊新潮

■ 1982年：3件
現代の眼
サンケイ新聞
毎日新聞

■ 1983年：2件
朝日新聞
日経流通新聞

■ 1984年：3件
朝日新聞
月刊不動産流通
サンケイ新聞

■ 1985年：3件
藝術新潮
週刊文春
日新建材ニュース ぱろす

■ 1987年：2件
オリンパスフォトグラフィ
炎芸術

■ 1988年：1件
藝術新潮

■ 1993年：1件
NEXTAGE

■ 1995年：3件
フォーブス日本版
ラマンチャ
YANASE LIFE